

# タラノメ穂木採取後の頂芽摘除が側芽の促成収量に及ぼす影響

岡部和広

(山形県最上総合支庁農業技術普及課産地研究室)

Effect of Late Autumn Pinching on Yield of Lateral Buds of *Aralia elata* in Forcing Culture

Kazuhiro OKABE

(Agricultural Technique Improvement Research Office, Agricultural Technique Popularization Division,  
Yamagata Mogami Area General Branch Administration)

## 1 はじめに

タラノメ栽培は、県内最上地域を中心に促成栽培が拡大しており、東京都中央卸売市場では約 55%のシェアを有している。これまで穂木養成時における効率的な施肥<sup>1)</sup>や、生産性の高い促成管理<sup>2)</sup>等の技術を開発し、産地拡充に寄与してきた。しかし、晩秋に穂木を採取して貯蔵し、最需要期に向けた3月から4月の促成では、貯蔵中に穂木が消耗し、促成時における生産性の低下が問題となっている。そこで、春期の促成においても生産性が高い、穂木貯蔵時の処理法を検討した。

## 2 試験方法

供試系統は県内主力の‘蔵王系’とし、2004年5月に定植して当室慣行管理で養成した4年生木を供試した。試験年の2007年は11月22日に穂木を200本採取し、主茎長が210cm、節数が28節、重量が1550g程度の穂木を15本取り出し、網室内の一部をブルーシートで覆った貯蔵室を作成し(2m×6m×3m)、立てたまま静置して穂木貯蔵を開始した。試験はそのまま静置する慣行の無処理区、湿らせたオガクズの上に穂木の切り口を密着させ、適宜穂木の上から散水する水補給区(一部農家で取り組み中)、頂芽を摘除してから無処理区同様に穂木を貯蔵する摘除区の3区で、各区5本供試した。翌年4月23日に穂木を取り出し、長さ7cm以上の駒木に1節ごと、7cmを確保できないものは2節ごとの駒木に切断した。翌24日より促成ベッドに並べ、15℃を目標に無加温で当室慣行法による促成管理を行い、1芽ずつ調査を実施し、節数の1/3ごとに下位節、中位節、上位節に分けて解析した。

## 3 試験結果及び考察

穂木は貯蔵中に重量が減少し、促成時には貯蔵前重量比で無処理区が75%、摘除区が73%にまで低下した(図

1)。摘除区は頂芽を摘除した切り口から水分がロスしたため、重量がやや軽くなったと考えられた。水補給区は85%と減少幅は少なく、貯蔵後半には頂芽が発芽していた(写真1)。穂木貯蔵温度が3月以降上昇していることから(図2)、水補給区は頂芽の発芽、伸長が進んだと考えられた。

供試穂木5本分における側芽の合計商品重量は、無処理区と水補給区が約340gに対し、摘除区は400gで、上位節を除き、いずれの節位も摘除区が重かった(表1)。摘除区はすべての節位で商品化率が高く、1芽重量が大きく、生産性に優れていた。また、階級別個数でも摘除区は2LからMクラスが多く、規格外の3.3g未満が少なかったため、商品化率が他区よりも高かった。収穫までの日数は、無処理区と摘除区がほぼ同じで、水補給区はこれらより数日早かった。

無処理区に対し、水補給区は頂芽重量が18gで2.5倍程度重いこと、収穫までの日数も4日で13日も早いこと、中位節の側芽は軽く、上位節では重いことなどから、貯蔵中の頂芽の伸長により、頂芽へ貯蔵養分が多く使われたと考えられた。一方の摘除区は、頂芽に貯蔵養分が使われない条件だったため、側芽の収量性に与えるロスが低減し、相対的に側芽収量が高まったと考えられた。

10a 当たりの粗収益を試算すると、摘除区は上位階級のM以上の収穫個数が多く、頂芽を含めた収益性が高かった(表2)。

本試験は穂木貯蔵前に頂芽を摘除し、促成タラノメの生産終期である5月上旬収穫での検討のため、今後は摘除時期、3~4月の収穫期における効果等の検討が必要と考えられた。

## 4 まとめ

タラノメの穂木を採取後に、頂芽を除去してから貯蔵すると、4月下旬促成時における側芽の1芽重量が大きく、穂木1本当たりの収量も高く、頂芽を残したまま貯蔵する方法よりも収益性が高かった。

引用文献

1) 大木淳ら. 1999. タラノキの施肥方法. 東北農業研究. 52:229-230.

2) 大木淳ら. 2006. タラノメ促成栽培における温度条件が収量と腐敗に及ぼす影響. 東北農業研究. 59:211-212.

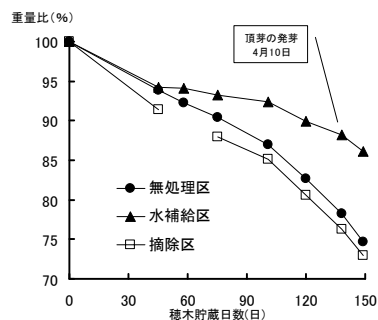


図1 穂木重量比の推移



写真1 頂芽の発芽、伸長状況(左: 無処理区 右: 水補給区 2008. 4. 10)

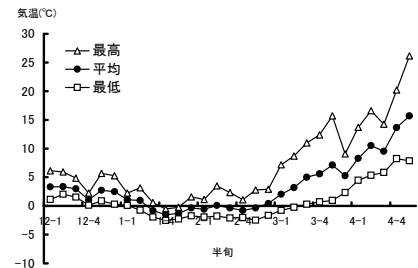


図2 穂木貯蔵中における気温の推移

表1 収量および品質

(2008. 4. 24 促成 穂木5本合計)

区 <sup>z)</sup>	節位 <sup>y)</sup>	収穫重量			収穫個数					商品化率 (%)	商品側芽の品質			収穫まで日数 <sup>w)</sup>	
		商品 (g)	商品化率 (%)	1芽重 (g)	側芽の階級 <sup>x)</sup> 別個数(個)						全長 (cm)	ガク長 (mm)	芽径 (mm)		
					2L	L	M	S	2S	計					
無処理区	頂芽	35.5	100.0	7.1	—	—	—	—	—	5	100.0	—	—	—	17.6
	下位	203.9	90.8	6.0	1	3	19	9	2	34	81.0	7.4	38.7	16.3	16.8
	中位	97.1	71.2	4.2	0	0	1	14	8	23	57.5	5.9	31.0	14.0	18.2
	上位	43.4	76.3	4.3	0	0	0	8	2	10	58.8	5.8	30.1	14.0	17.2
	側芽計	344.4	83.8	5.1	1	3	20	31	12	67	67.7	—	—	—	—
水補給区	頂芽	88.3	100.0	17.7	—	—	—	—	—	5	100.0	—	—	—	4.2
	下位	207.9	89.4	5.9	1	2	19	12	1	35	83.3	6.9	34.5	15.7	14.3
	中位	77.6	65.8	3.9	0	0	1	6	13	20	55.6	5.4	29.4	13.5	15.0
	上位	50.9	69.4	4.6	0	0	3	6	2	11	57.9	5.4	33.5	13.4	14.6
	側芽計	336.4	79.4	5.1	1	2	23	24	16	66	68.0	—	—	—	—
摘除区	頂芽	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	下位	224.9	95.3	7.0	5	4	18	5	0	32	84.2	7.5	38.6	16.4	17.0
	中位	127.2	85.3	4.4	0	0	6	18	5	29	78.4	6.3	33.6	14.0	18.4
	上位	48.7	93.8	5.4	0	0	1	6	2	9	84.6	6.2	35.4	14.6	17.0
	計	400.8	91.7	5.7	5	4	25	29	7	70	81.8	—	—	—	—

z): 無処理区、水補給区は頂芽をつけたまま穂木を貯蔵した。

y): 全節数を3等分し、基部から下位、中位、上位に配分した。なお割り切れない数は上位節に加えた。

x): 最上広域園芸振興協議会の規格により、2L $\geq$ 8.7g>L $\geq$ 7.5g>M $\geq$ 5.2g>S $\geq$ 3.8g>2S $\geq$ 3.3gとする。

w): 水補給区の頂芽は、5個中2個が駒木切断時に収穫した。

表2 10aあたり粗収益の試算

区	頂芽	階級別個数(個)					階級別金額(上段:規格、下段:50gパック単価 <sup>z)</sup> )					計	
		側芽					頂芽 <sup>y)</sup>	2L	L	M	S		2S
		2L	L	M	S	2S	@200	@230	@250	@270	@180	@130	
無処理区	1,000	200	600	4,000	6,200	2,400	28,600	9,200	21,500	108,000	79,800	19,500	266,600
水補給区	1,000	200	400	4,600	4,800	3,200	50,000	9,200	14,300	125,000	61,800	26,000	286,300
摘除区	0	1,000	800	5,000	5,800	1,800	0	46,000	28,600	135,000	74,600	14,700	298,900

z): 東京都中央卸売市場における4月の平均単価(2003年~2007年の5年平均)

y): 1芽重量に関わらず、50gパックに最低4個の量目となるため、無処理区は7個、水補給区は4個で試算した。